

静岡大情報学部の狩野芳伸准教授(37)＝情報理工学＝の研究室が、電子カルテの文章を自動解析して病名ごとに分類するシステムの精度を競う国際コンテストで首位の成績を収めた。コンピューターが患者の病気を診断する

「医療診断支援システム」の実現につながる技術で、狩野准教授は「コンピューターが人間にどこまで迫れるか。未来への第一歩」と手応えを感じている。研究成果をまとめた論文を7日公開する。(石川由佳理)

静大のカルテ解析システム

電脳名医へ一歩

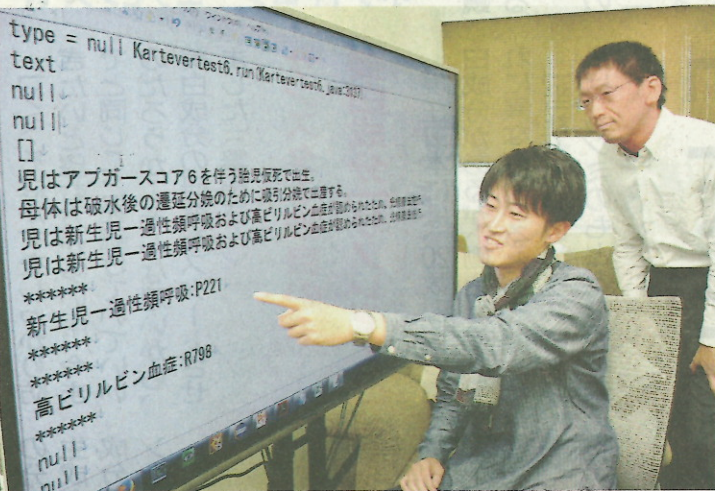
コンテストは、日本の自然言語処理技術の研究者が一月二十一日～二十四日の日程で開き、国内外の八チームが参加。期間内に七十八人分の模擬カルテデータをコンピューターに読み込ませ、世界保健機関(WHO)が作成した病名ごとのコードにどれだけ正確に分類できるかを競った。狩野研究室の正解率は34.8%で、トップだった。システム開発を担当したのは四年生の崎下雅仁さん(三〇)愛知県豊橋市。電子カルテの文章の中から「〜と診断された」「〜と認められた」といった言葉を含む文を抜き出し、病名や

国際大会での中率トップ

症状を探す。英単語を日本語に翻訳するなど、五つの段階を踏み、最終的に正しい病名のコードを割り出す。電子カルテ特有の言い回しに基づいたデータ処理のルールを設定していたことで、ほかのチームより正確さが増したという。

狩野研究室では、医療診断支援システムの実現に向けた研究を進めており、コンピューターが医師と同じような診断ができるよう、医師国家試験に自動的に答えられるシステムの構築などにも取り組んでいる。コンテストで用いた技術は、医療診断支援の開発につながるステップと位置付けている。

医療診断支援システムが実現すれば、医師不足にあえぐ過疎地域で専門的な医療を施すことが可能になる。また、技術的なハードルは少なくないが、崎下さんは「情報分野の技術でへき地の医師不足をサポートしたい」と力を込める。狩野准教授は「道のりは長いが、システムの精度を高め、コンピューターが医師のように診断する未来につなげたい」と語った。



電子カルテから病名を解析、分類するシステムについて狩野准教授(左)に説明する崎下さん(右) 浜松市中区で